

## 震災後の子どもたち(24)

### 季節里親さんと園児

上崎 温子

今月からお盆休みに入り、園児の帰省が始まりました。園に残っている子どもが六甲山へ飯盒炊さんに出かけるのを見送ったかと思うと小三の謙二君が大きめのリュックを背に北館から飛び出してきて、私と目が合うや、Vサインをよこしました。玄関の前におられた御夫婦は彼の里親さんと気づきました。謙二君はお泊まりの準備万端ととのえて朝から

お迎えの到着のお知らせを今か今かと電話のそばから離れなかつたそうです。

家庭の事情で長期の休暇にも帰省できない園児が二割ほどおり、その中には家庭での生活を送ったことのない子どももかなりいます。そんな子どもたち  
に家庭の体験を得させてくれ、精神的な支えとなつてくれているのが年末年始、春休み、夏休みの数日

を家庭に招んでくださる季節里親さんです。都合が  
つけば、幼稚園の親子遠足、運動会にもお弁当を  
作ってご一緒してください。

里親さんをお父さんお母さんと呼ぶ子、おじさ  
んおばさんと呼ぶ子とがいますが、おじさんおばさ  
んと呼ぶように言っても、お父さんお母さんと呼び  
たいという子もいます。そうした子が多いよう  
です。子どもがお父さん、お母さんとどんなに口にし  
てみたかったか、痛いほどわかります。親に会った  
ことのない子どもは、季節里親を実親と思いこみ、  
後に実親でない知って、大変な辛い思いをするこ  
とがあります。乳幼児期に面会やお迎えのある親子  
を見ていて、里親さんと知らせてあってもお迎えが  
あると、お父さんお母さんと思ひこんでしまうので  
しょう。五、六歳になりますと、何かが違うことに  
気づくようです。

拓也君は、一週間は里親宅に滞在しますのに六歳

の頃、どうしてか早く帰るといい、二日で戻って来  
てしまいました。理由を問うて何も言いませんが、  
お母さんの話が出ると様子がおかしいのに受持ちの  
保母は気づいていました。或る日の夕食時に、誰か  
が里親さんで何？ ときました。里親さんを砂糖  
屋さんだと思っていた子もいましたから、本当は、  
皆よくわかってはいないようです。保母が、本当の  
親ではないが、みんなのことを大切に思い、見守っ  
てくれている人というような説明をしますと、拓也  
君もきいていて、「本当のお母さんじゃないんや」  
と泣き出しました。これを機会に、園長は実母の写  
真を見せ、実母のこと、里親さんのことをじっくり  
と話してあげました。小学三年生になった今、彼は  
自分の里親のことをちゃんと紹介することができま  
す。

三歳からお世話になっている正男君も苦しんだ一  
人でした。彼の里親さんは震災のあと、関東地方に

転勤されましたが、正男君の里親を続けたいと言われ、保母が新幹線で送っていきました。五歳でした。楽しい休暇が終わり神戸に帰る用意をしているとき、正男君が初めて涙を流し、自分は学園に帰らねばならないと自分で決断したと、その時の様子を里親さんが話してくれました。彼は既に里親が、自分の実親でないことがわかっていて、それでも尚、家族の一員として確かな位置を獲得した生活が続けられないのかという思いを振り切るのに苦しんだのでしよう。現実ともう一つの現実の間に折り合いをつけるのは、全く実親を知らない子どもほど、難しいようです。

里親にお世話になる年齢は、多くは乳児院から幼児ホームに上ってきた三歳頃です。その頃は未だ、本当の両親かどうかでは悩みませんが里親宅での数日間、自己表出の自信を生み何よりも、「安心」があったのでしよう、別れるときは涙をため、ベッ



ドにもぐりこんで、オタータンと泣いている子もいます。そうしたことを繰り返すうちに、先ほどの深刻な悩みを持つこともありませんし、そうした苦痛を表面に現さず、里親とのよい関係を続けている子もいます。

恵利ちゃんは二歳の頃、他の乳児院から私どもの乳児院に移ってきました。二歳七、八カ月の頃でしたか、ある日、栄養士が休んだので誰が「調乳」に入るか、数人の保母が相談していますと、傍にいた恵利ちゃんが「タカノ先生に入ってもらったらいわ」と言いました。保母達は一瞬呆気にとられ、そして笑いに笑ったそうです。大人の話をしっかりと

聞き、まさしく正答。タカノ先生は栄養士ではありませんが、度々調乳室で食事づくりをしており、その日も出勤しているのを恵利ちゃんはずっかりと見ていたのです。このエピソードはいかにも恵利ちゃんといった感じが致します。三歳で幼児ホームに上ると、季節里親さんが決まり、とてもいい関係がつけられていきました。

震災のとき恵利ちゃんは小学二年生でした。地震から四日目、大雨の予報があり、学園の南と東に流れる川の擁壁の崩壊が一層進み、建物の倒壊を恐れ、市内の他施設に全員避難しました。その間に学園に一人の訪問客がありました。八年前に分かれた恵利ちゃんの母親が、いてもたってもおられず関東から娘の無事を尋ねて来たのでした。園長はすぐに先の施設に案内しました。私は学園に残っていて、再会の場面を見ていないのですが、恵利ちゃんには、想像もなかった実母の出現は、何が何だかわ

からなかったのではないのでしょうか。どうもそのような感じでした。その後一、二度連絡があり、会ったのですが、今、彼女は会いたくもないと言います。それが彼女の本心かどうかは判りません。本当に母親のことを思うのはこれからかもしれません。

恵利ちゃんは、実母との再会後、里親さんのお宅に三月まで滞在し、地元の小学校で二学期を送りました。彼女は里親のお母さんとも真剣に口ゲンカをするほど馴染んでいます。お商売の配達についていたり、お姉さんとカタログの宛名を地図で探したりとお手伝いをし、お父さんの仕事の大変さを五年のとき作文に書いていました。彼女の里親さんが自営業であることは、家族の協力があって、そこに家族一人ひとりの生活が成り立っていることを、一層よく理解させたのではないかと思います。

恵利ちゃんと親のことに思いを馳せているうちに昭和四十年頃の一人の少年を思い出しました。彼は

頭の回転が速く腕白でユーモラスな少年でしたが、中学に入る頃、彼の反抗には随分てこずりました。それが中学二年の頃にはすっかり変わってしまった。落ち着きが出て、班（当時は大舎制）の年少児の衣類の洗濯、整理をはじめとして、きめ細かに面倒をみ、安心して任されるほどでした。この頃の高級生や下級生には彼の影響を受けたものが少なからずおり、尊敬さえしていました。

二十二歳のとき、相談があると、就職したA県から遙々訪ねてきてくれた時、私は長年、不思議に思っていた彼の変化について尋ねました。それは、思いがけない妹からの電話だといいました。その突然の電話は、幼児だった彼が、母親が妹の手を引いて学園の橋を渡っていくのを見つめていた光景を一時のうちに照らし出したのです。学園に残された彼は、日々の生活の中で次第に母と妹を忘れ、天涯孤独だと思っていたのです。忘れるということが、あ

り得ようかと思うかもしれませんが、それが彼には生きる術であったのではと想ったりします。自分はそのみんなとは違うのだ、母や妹もいる、今までのようではだめだと思い、いつの日か母と妹と暮らせることを夢みました。それが新たに生きる力となったのでした。しかし、夢が現実となった時、幼い時から共に暮らさなかった母と子の情は流れ合わず、自分が得ている生活の将来さえ、又もや危うくされそうな親の願い、それでも母親を無視できないと苦しんでいました。

一方、恵利ちゃんは、三歳から大らかな里親さんとの出会いの中で、お父さん、お母さん、お姉さんと呼ぶ対象を得て、のびのびとした生活を受けています。彼女にも恐らく人にはうかがえぬ屈託があることでしょう。しかし、彼女を大切に思ってくれている里親さんの愛情を胸いっぱい吸いこんで、自分の感情を豊かにし、ゆつくりとでいいから、実母

のことも考えられるように成長していつてくれたらと思います。

季節里親さんに園児がお世話になるようになって二十数年がたちました。幼児期から高校卒業後まで、その後も往来が続いている子どもがいる一方、里親さんの事情の変化でやむなく諦めざるを得なかったケース、双方の相性が悪く跡絶えてしまうケースもあります。慎重に選ばれたおたがいであっても、一つ家ですごせば、いろいろな行き違いがあるのも当然のこと、率直に受入れるしかありません。

三年前から、季節里親さんを仲介してくださっている家庭擁護促進協会、里親さん、そして学園との懇談会が年一回行われるようになりました。双方の生活での様子を語り、ききながら、涙したり、笑ったり、教えられたりして、やっぱり、子どもっていいなあと思ってしまう会です。子どもたちは、集団

の中では生きづらいことが沢山あります。私どもが知らないところを季節里親さんが、補い支えてくれています。

震災から四年目の夏、過日、学園の隣のシスターにばったり会いました。疲れた顔をしていて、仮設の訪問看護の帰りだといいました。仮設は三月に解消されたとばかり思っていました。七月の新聞で五〇〇世帯近く残っていることを知りました。私は自分の勤務する施設のことしかわかりませんが、仮設には恐らく老いた人達が多く住んでいるでしょう。八月は、広島、長崎の原爆の日、日航機墜落事故、そして終戦と、死者を悼む日々が続きます。陽ざしの強さが、今夏は一層影を濃くしたように感じられます。(人名はすべて仮名)

(社会福祉法人信愛学園)